インドの消毒に日本の農薬散布機

丸山製作所の機械＝デリー首都圏政府ケジリワル首相のツイッターから

田んぼや畑に農薬をまく日本メーカー製の機械が、新型コロナウイルス対策の「ハイテク消毒機」としてインドの街中で活躍している。デリー首都圏のケジリワル首相は「消毒には日本製ハイテク機械が出動する」と安全性をアピール。メーカーに話を聞くと、明治時代から手がける消火器の技術を進化させて生み出した製品だった。

街中で活躍　消火器が原点

この農薬散布機をつくったのは、農機具メーカーの丸山製作所（東京都千代田区）。首都圏政府によると、デリーで感染者が多い地域を中心に、70台の農薬散布機で道路や家屋の消毒作業をしており、うち10台が同社製。「自分がいる地域にも日本のハイテク機械を派遣してほしい」などと、SNSでも話題になっている。

同社製品は薬をまく「腕」の部分が最大15・9メートルまで広がり、一度に広範囲の散布ができる。短くたたんで範囲を狭めることもでき、デリーに多い狭い路地でも走行可能。特殊なノズルで霧の粒子を細かく、均等に噴射できる。

今泉孝之・人事総務部長によると、同社は1895年の創業時から消火器をつくり、製品はかつて丸山式自動消火器と呼ばれた。「容器内の液体や物質を、圧力を高めて噴射する。基本原理は消火器も農薬散布機も変わらない」

世界の約80カ国に製品を輸出する同社。機械が走る速度を感知し農薬の噴射量を自動的に調節したり、ドローンで散布したりと性能を高める改良を続けてきた。こうした開発の歴史が、世界で求められる品質の支えとなっている。

中国の感染現場でも農薬散布機が消毒用として活用され、最近は米国からも引き合いが来る。コロナ対策として防護服に薬を噴射して消毒する装置も試作済みで、売り出す予定だ。今泉さんは「危機の時代に必要とされる製品を世に出し、少しでも社会に貢献できればメーカー冥利（みょうり）に尽きる」と話している。（奈良部健）